

# ZEPHYROS

1997年  
第2号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス  
The National Museum of Western Art, Tokyo

## 目 次

### 特集 生まれ変わる本館

アートと空間が語りかける憩いの場へ	……3
—国立西洋美術館本館に描く夢—	
建築家・東京芸術大学教授 藤木 忠善	
リニューアル、本館	……………6
—災害に強い建物を目指して—	

---

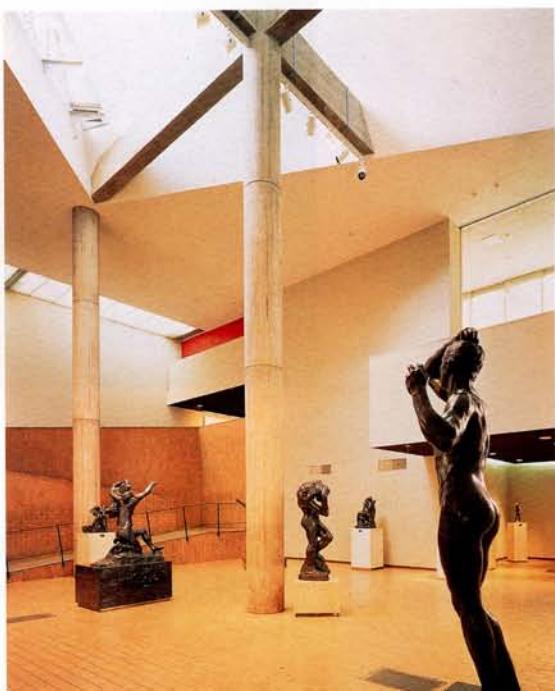
「絵とか彫刻はみんなのものですから…」	…7
国立西洋美術館学芸課長 雪山 行二	
'97展覧会リポート	……………8
'98展覧会スケジュール	……………9
エッセイ 「上野の杜」発 ②	…………10
台東区立下町風俗資料館館長 椎名 勤治	
財団インフォメーション	……………11
ゼフェロスギャラリー	

### 特集

## 生まれ変わる本館

フランスの建築家、ル・コルビュジエが設計した本館は、38年にわたり、多くの人々に西洋美術との出会いの場を提供してきました。

その本館が、21世紀へ向けて地震にも強い建物として生まれ変わろうとしています。



# アートと空間が語りかける憩いの場へ

—国立西洋美術館本館に描く夢—

建築家・東京芸術大学教授 藤木 忠善

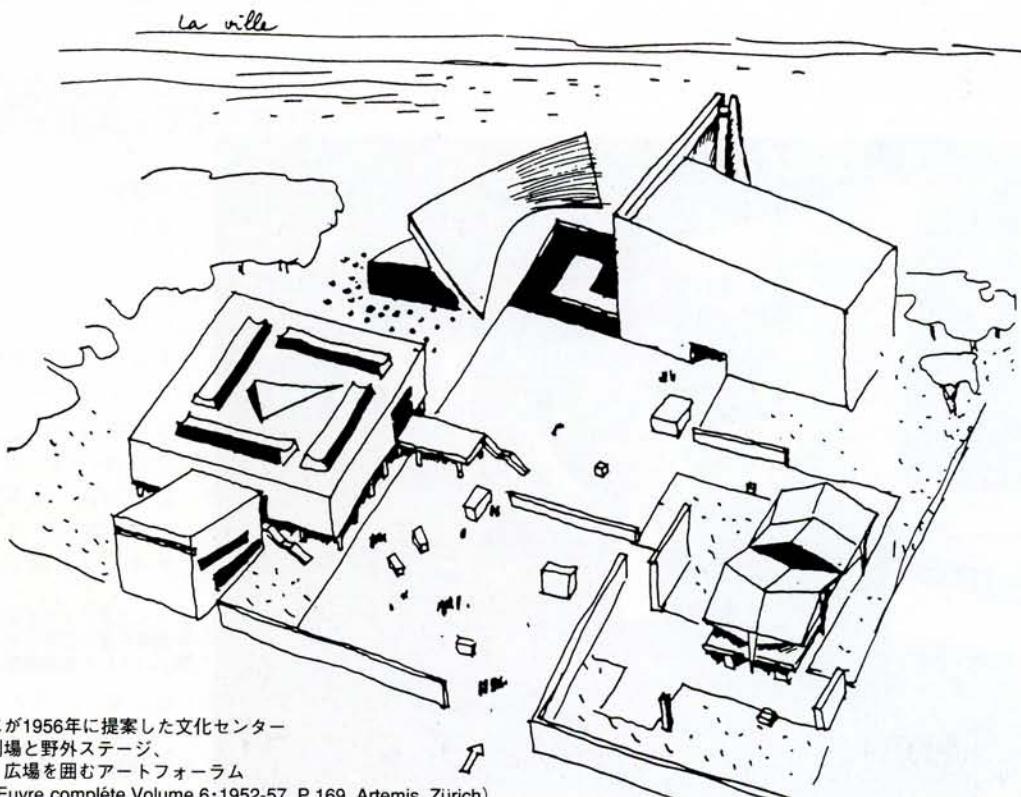
## 国立西洋美術館オープンの興奮

国立西洋美術館本館は、講和条約締結後、フランスから返還されることになった松方コレクションを収める美術館として建てられた。ル・コルビュジエが設計者として選ばれたのは、ルーヴル美術館長サール氏の推薦、日本に三人の弟子（前川国男、坂倉準三、吉阪隆正）がいて協力できることなどによると聞いている。ル・コルビュジエは1955年に来日して敷地を調査し、美術館と劇場を含む文化センターを提案してきた。芸術の国際交流の場をつくることが、戦争で孤立した日本にとって役立つと考えたのだろう。しかし、当時の日本にはそれを受け入れる余裕はなく、美術館だけが実現したわけである。

ル・コルビュジエの設計図をもとに工事が進められ、1959年春に本館が完成した。松方コレクションの日本到着が近づき、ロダンの「地獄の門」「カレーの市民」「考える人」をどこに置くかが問題になった。管理者であった文部省は館内に置くものと決めていた。上野

直昭、村田良策、矢代幸雄、吉川逸治の諸氏が建築現場に集まり「海外では彫刻は屋外が多い」、「痛んだら、また複製を頼めばよい」と文部省を説得した。彫刻は庭に出すことになったのだが、管理上、塀を設けることを要求され、庭を公園にするというル・コルビュジエの考えは残念ながら実現しなかった。

建物が竣工する直前になって運営スタッフが着任した。富永忽一館長以下、嘉門安雄、高階秀爾（現西美館長）、穴沢一夫、中山公男、黒江光彦、佐々木英也他の諸氏であったと記憶している。いざ、開館の準備が始まってみると問題だらけであった。美術館の常識を破った多方向の天窓から入る光が不均一なため、それを補う照明の改修が必要であった。絵画を吊る装置も自由度がなく展示に不都合であった。また、スタッフの部屋が少なく荷解き作業場を事務室にするという有様であった。そのような苦労の後、本館は1959年6月、開館にこぎつけた。それから数ヶ月は長蛇の列ができ、前庭と中央ホールはいつも人で一杯であった。その観客の熱狂ぶりは戦後の日本人が如何に芸術に飢えていたかを感じさせるものであった。

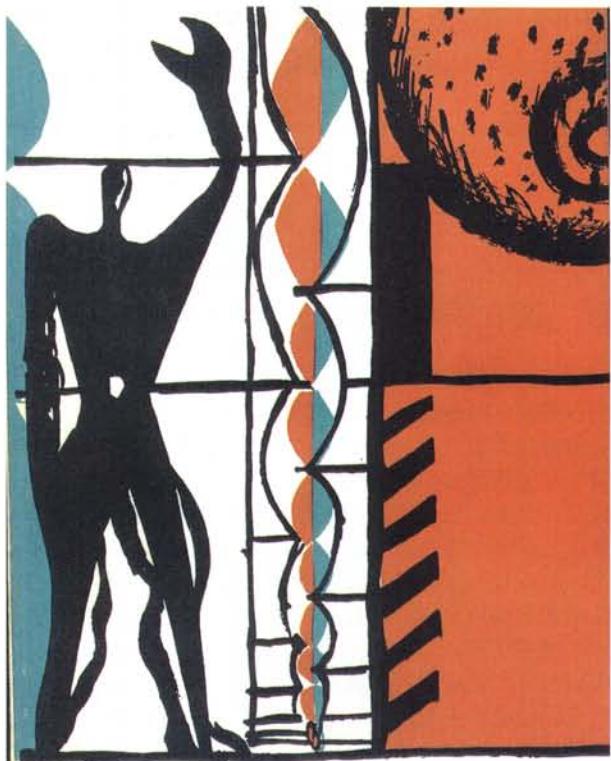


ル・コルビュジエが1956年に提案した文化センター  
左が本館、上が劇場と野外ステージ、  
右が企画展示場、広場を囲むアートフォーラム  
(Le Corbusier Œuvre complète Volume 6·1952-57, P.169, Artemis, Zürich)

## コルビュジエ建築を解く鍵

ル・コルビュジエ(1887-1965)が著名な建築家であることはいうまでもないが、複雑な空間をもつ本館の建築を理解するには、彼の、建築以外の仕事にも目を向ける必要がある。彼は、生まれ故郷であるスイス、ショーレ・ド・フォンの美術学校を出た後、ウィーン、ベルリンで建築・工芸の新しい運動に触れ、パリに出た彼はキュビズムの影響を受ける。1918年、キュビズムを批判し、理性的で秩序のある構成を目指すピュリスム(純粹主義)を唱え、画家としてデビューした。1920年には雑誌「エスピリ・ヌーヴォー(新精神)」を刊行し、芸術革新運動を展開した。その後、1927年の国際連盟本部の設計コンペティションに当選し、建築家としてその名を表した。彼には「建築をめざして」はじめ、多くの著作があり、それは現在でも建築を志す者のバイブルとされている。

このような経歴が示すように、あらゆるメディアを駆使して自己を表明してきたル・コルビュジエは建築家、著述家、批評家、詩人、画家、彫刻家であった。彼の生活も午前中は自宅のアトリエで絵を描き、午後は建築のアトリエで仕事、夜は著述というふうであったという。彼の鋭い空間感覚は、こうして、理論の世界、絵画の二次元世界、そして建築という三次元世界における思考と実践を同調させながら構築されたのである。



## Le Corbusier

1961年に本館で開催された「ル・コルビュジエ世界巡回展」目録表紙は本館の建築に用いられた黄金尺「モデュロール」を示すコルビュジエの絵



「ル・コルビュジエ世界巡回展」会場  
本館展示室の空間に彼のデザインによる  
展示パネルと建築模型が陳列された



サザビー社のオークション目録「ル・コルビュジエの絵画と彫刻」(1969年)  
表紙はピュリスム時代の絵「すみれ色のダイス」(1926年)の部分

## ピュリスムの空間美術館

ル・コルビュジエの建築理論は「近代建築五原則」といわれるピロティー、骨組みと壁の分離、自由な平面、自由な立面、屋上庭園に要約される。本館の建築にもこの全ての要素がみられる。ここではその五原則に加えて、彼が1931年のパリ芸術センター案以来、提案してきた渦巻き形に成長する美術館の原型が重ね合わされている。ピロティーを抜けて展示室の中心にスロープで昇っていく動線がその特徴である。展示室は中央ホールの吹き抜けの周りに広がり、天井から吊られた照明室によって変化に富んだ空間をつくっている。四ヶ所の穿たれた大窓（現在は遮蔽されている）は展示室に外部の空間を貫入させ、観客に方向感を与えるように考えられている。

本館には、中央ホールの吹き抜けを昇るスロープとすべての階を突き通すように設けられた廻り階段がある。観客はこのスロープと廻り階段を利用して館内を上下し、回遊することによって、この美術館の全ての空間が同時性を持って理解できる。言いかえれば建物全体が透明感をもっている。一度、館内をめぐった観

客は、その空間のしくみを自分の頭のなかで組み立てることができる。この空間パズルの面白さこそ、本館が他の美術館と区別される点である。

この同時性と透明性は、キュビズムの画家たちがキャンバスの上で追及したものであり、特に、ル・コルビュジエが好んで描いた透明なオブジェが複雑に重なり合った作品にみられるのと同質のものである。つまり、彼がピュリスム絵画の方法を建築空間に適用したと考えれば、本館の建築はピュリスムの空間美術館ともいえる。

## 芸術の総合をめざして

本館は変幻自在の空間をもち、照明もむずかしい。この美術館を使いこなすスタッフの工夫と努力は開館以来続いているが、ル・コルビュジエは、むしろ、自然光の変化を期待していたというから、ここで、その考えに沿った展示を一度は試みてみる価値はある。人は安息を得たい時、音楽と同様に絵や彫刻との心の交流を欲しているのである。その環境として、光と陰のある豊かな空間を望むのは当然であろう。明るい光で鮮やかな色彩を見たい絵、暗く静寂な場所で対話したい絵もある。このような展示は絵画の保存という点から許されないのであろうか。

昨今の美術館の展示室というのは、窓のない息のつまる空間に絵が単調に並べられている。ルーヴル美術館でも絵画の保護のために照度を落とすという。しかし、保存と展示には本来、矛盾があるわけで、場合によっては現在の高い技術でつくられた複製画の活用を考えてもよいのではないか。現代の美術館は從来からの収集、展示、研究に加えて、市民の知的な憩いの場としての役割が求められているが、その点からも展示室で絵を楽しむ環境についての新しい提案が望まれるところである。

本館から出発した西洋美術館も新館が加わり、さらに前庭の地下に21世紀ギャラリー（仮称）がオープンするとより完備した美術館となり、様々な試みが可能になる違いない。そこで、本館において絵画と彫刻、光と陰、そして空間が相呼応する展示の試みがなされる事が期待される。これが実現すれば、芸術の総合ともいえる美術館が出現するに違いない。

ふじき ただよし / 1933年 東京生まれ

1956年 東京芸術大学美術学部卒業  
1958年 国立西洋美術館設計監理担当（坂倉準三建築研究所員）  
1989年 国立西洋美術館整備調査委員会委員  
1995年 国立西洋美術館本館等改修検討委員会委員

# リニューアル、本館

## —災害に強い建物を目指して—



耐震改修工事中の  
国立西洋美術館本館

1995年1月に発生した阪神・淡路大震災の際、多数の尊い人命が奪われ、また、多くの建物に被害が出ました。後に行われた建物の被害状況調査の結果、1981年以降のいわゆる現行耐震基準の建物と、それ以前の旧耐震基準の建物との間では、被害程度に大きな差が見られました。

1959年に建てられた国立西洋美術館本館は、当然旧耐震基準の建物であり、不特定多数の人々が出入りする公共施設としての安全性や国民共有の財産である名画等の保護の観点からも、早急の改善を考えなければなりませんでした。しかも、本館はフランスの世界的建築家ル・コルビュジエが設計した我が国唯一の建物（アジアでもインドに2例あるだけ）であり、文化的な観点から「現状保存」しながら「補強」するという一見矛盾するような方法が「国立西洋美術館本館等改修検討委員会」（委員長 岡田恒男東京大学教授）で検討されたのです。

その結果、本館を支える49本の柱の下に特殊な高減衰ゴムの免震装置を取り付けることによって、地震力を柳に風と受け流し、ゆっくり揺れることにより地震に強い建物にするという「免震レトロフィット」工法が日本で初めて取り入れられることになり、これによって、「現状保存」と「補強」の両立が実現しました。

具体的な工法は、①既存の床を撤去 ②基礎周辺を掘削し、既存の基礎梁を補強（根切） ③鋼管杭を圧入して建物を仮受けし、さらに基礎下部を掘削 ④底盤コンクリートを打設し免震装置の取付け ⑤鋼管杭を切断し撤去する という流れになります。

平成7年度から始まった工事も、現在、④の免震装置の取付段階まで進んでおり、今年度中にはすべての工程を終了します。並行して行われている新地下展示場「21世紀ギャラリー（仮称）」の工事のほうも年内には終了し、いよいよ来年度には新しく生まれ変わった国立西洋美術館をご覧いただける運びとなっております。



基礎下に設置中の免震装置



# 『絵とか彫刻はみんなのものですから…』

国立西洋美術館学芸課長 雪山 行二

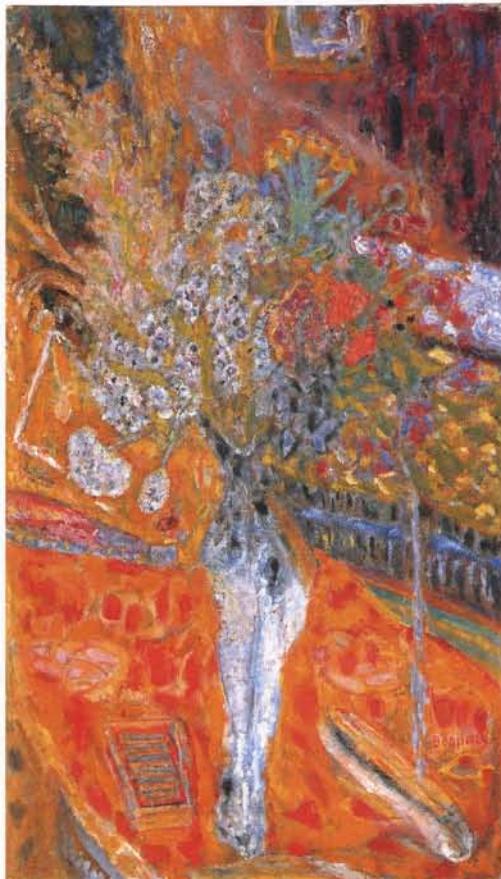
国立西洋美術館の所蔵作品のなかに数多くの寄贈作品が含まれていることは、意外と知られていない。所蔵作品の数は設立時(1959年)の370点(松方コレクション)から、現在2164点と大幅に増えているが、そのうちの実に294点が寄贈作品なのである。

1965年に山村徳太郎氏から寄贈されたエルンスト、ミロ、アルプ、ポロックら、現代美術のコレクション、そして、1970年代後半に梅原龍三郎画伯から寄贈された古代ギリシャのキクラデス彫刻、ルノワール、ドガ、ピカソ、ルオーラの作品は、当館のコレクションに大きく幅と厚みを与えた。そのほか、ステイン《狂女》(林泰氏、1960年)、ロダン《バルザック(最終習作)》(朝日新聞社、1962年)、デュビュッフェ《美しい尾の牝牛》(平野逸朗氏、1979年)などは、当館にとって欠かすことのできない貴重な作品である。

近年寄贈を受けたものでは、ヴュイヤール《縫い物をするヴュイヤール夫人》(フジカワ画廊、1990年)、ドラン《ジャン・ルノワール夫人》(山本英子氏、1990年)、藤田嗣治《坐る女》、ボナール《働く人々》(柿沼富二朗氏御遺族、1992年)、モンティセリ《公園にて》(上野久徳氏、1995年)、ボナール《花》(吉井長三氏、1996年)などがある。《坐る女》は1926年という藤田の絶頂期の傑作であり、ドランの肖像画は、画家ルノワールの息子の映画監督ジャンの妻をモデルにしているが、どこか黒柳徹子さんを想わせる。ボナールは、1987年に購入したジャポニズムを示す初期の《坐る娘と兎》に加えて、3点となった。



アンドレ・ドラン《ジャン・ルノワール夫人》  
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1997



ピエール・ボナール《花》  
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1997

私もこれらの寄贈のいくつかのお手伝いをしたが、その中で最も強く記憶に残るのは山本英子さんのことである。山本さんは東京の蒲田にある小さな病院の院長で、当時、ガンの末期状態にあった。若いころは画家を志したが、結局、家業を継いだのか医者になった。それでも美術への愛はいっこう衰えず、画廊で好きな作品を見つけるとどうしても欲しくなり、月賦をしてでも手に入れた。毎月の支払いは200万円もあったという。

山本さんのいかにも心地よさそうなお住まいには、居間、食堂、廊下などいたるところに絵や彫刻が飾られていた。ドラン、デュフィ、ピュッフェ、ロダン、ブルデル、クラヴェー、大作は少ないが、いかにもコレクターの趣味をうかがわせる作品ばかりであった。山本さんの目の前でこれらの作品を壁からはずすことには躊躇した。しかし、山本さんは毅然として言った。「意識がしっかりしているあいだに整理しておきたいの。私は長い間これらの作品といっしょに暮らせて本当にしあわせでした。絵とか彫刻はみんなのものですから。」

作品を寄贈してくださる動機はさまざまであろう。しかし、こういう方々によって西洋美術館は支えられているのである。皆様、本当にありがとうございました。

## 国立西洋美術館展

### 愛と生命の響き

会場：新潟県立近代美術館（長岡市）

会期：1997年4月12日（土）～5月18日（日）

入場者数：13,233人

冬がようやく去り、新しい芽吹きの季節とともに国立西洋美術館展は開幕した。同館の所蔵品の中から版画を中心絵画、彫刻、素描合わせて126点を選び、新潟県立近代美術館の所蔵品23点を加えて、ルネサンス期からバロック、ロココを経て、近代にいたる西洋美術の流れを概観する展覧会である。

時代区分による三部構成を基本としたが、実際の展示では古典を含む108点にのぼる版画のジャンルをいかに見せるかということが一つの焦点となった。そこで照明を抑え、緊張しつつ版画をじっくり鑑賞する回廊部分と、一転して明るく浮き彫りにされた開放的な雰囲気のなかで、彫刻や絵画を楽しみつつ眺める広い空間が交互に現れる展示構成とした。版画の線刻が醸し出す繊細な美が見る者の胸に伝わったようだ。特に中学生や高校生たちは、マンテニーニやショーンガウアーの銅版画に真剣な瞳を向け、その前で魅力を語り合っていたことが印象的だった。展覧会という形式に

とらわれず、作品の世界に自然に入り込んでいる彼らの姿が作品の本当の力を教えてくれたように思う。モノクローム表現を主体とする西洋版画は、実は最も身近にある芸術であることを再認識したのもこの展覧会を通して得られたことである。

新潟県立近代美術館 学芸員 平石 昌子



## 素材と表現

### 国立西洋美術館所蔵作品を中心に

会場：国立国際美術館（吹田市）

会期：1997年4月17日（木）～6月22日（日）

入場者数：13,951人

我が国には国立美術館が四つあるが、そのなかでも、国立西洋美術館と国立国際美術館は、最もかけはなれた美術館である。いうまでもないことだが、前者は、松方コレクションを中心とした由緒ただしい美術館である。地の利も良く、コレクションも泰西名画を中心



であるだけに、観客も多い。一方、後者は、何から何まで正反対である。地の利も悪く、コレクションも現代美術を中心であり、観客も少ない。

こうしたふたつの美術館が手を組むのは、ふつうならミスマッチと考えられるが、いまは、ミスマッチが歓迎される時代である。何が起こるか分からぬといふ淡い期待のもとに、展覧会は開催された。むづかしかったのは、天と地ほどの隔たりのある二館のコレクションを、どうつなぎ合わせるかということである。さんざん考えたあげく、同一作家の異なった素材による表現（絵画、素描、版画など）を可能なかぎり集めることで妥協が成立した。

ピカソ以外の作家について、そうした初志が貫徹できたかどうか、はなはだ心もとないことは、企画した当人がいちばん良く承知している。美術館の内外からいくつか不満が寄せられたが、これは、泰西名画から現代絵画までを一度に鑑賞できる素朴で素直な展覧会である。今風の気どったテーマがなくても、十分楽しめたと思う。

国立国際美術館 主任研究官 尾野 正晴

## ものがたりの森

### 子どものための美術展

会場：東京国立博物館

会期：1997年7月1日(火)～8月31日(日)

入場者数：75,034人

今年で3回目をむかえた（東京国立博物館との共催は2回目）子どものための美術展では、両館の収蔵品から物語をもとに描かれた絵画作品15点（東京国立博物館の収蔵品5点は展示替えのため、常時展示された作品数は10点）が紹介された。展示会場にはこれらの作品の他、中央にインフォメーションコーナーが設置された。そこには、作品の材料や触れるミニチュアの絵巻、油絵や日本画の材料、そしてそれぞれの作品のもとになった物語を記したシートなど、子どもたちの鑑賞を助けるための様々な資料が展示、用意された。

物語というテーマに惹かれたのか、それとも子どものための美術展というものに興味を感じたのか、会場には子どもたちに交じって、これまでになく多くの大人の姿が見うけられた。ともあれ、この展覧会で展示作品の時間・空間表現のおもしろさを発見した子ども

たち、そして大人たちが、次の発見を求めて再び来館してくれれば幸いだ。

国立西洋美術館 客員研究員 佐藤 厚子



### '98展覧会 スケジュール

## クロード・ロランと理想風景(仮題)

会期：1998年9月15日(火)～12月6日(日)

主催：国立西洋美術館、朝日新聞社



クロード・ロラン《アイネイアスのいるデロスの風景》  
ロンドン、ナショナル・ギャラリー所蔵

この展覧会は、西洋風景画の頂点に立つクロード・ロラン(1604/5-82)に焦点を合わせ、その初期作品から最晩年の作品を回顧すると同時に、彼の作品によって代表される西洋風景画の最も重要な流れである「理想風景」の意味と広がりとを検証しようとするものです。ロンドンのナショナル・ギャラリー（同館からはクロード晩年の傑作である、《アイネイアスのいるデロスの風景》が出品される予定です）、ルーヴル美術館、プラド美術館など世界の主要な美術館から出品される絵画、素描、版画など約60点のクロード・ロランの作品を中心に、クロードに強い影響を受けたターナーをはじめとする「理想風景」の系譜に属す画家たちの作品なども加え、全体で約90点の作品から構成されるこの展覧会は、ヨーロッパの風景画の歴史における最も重要な存在であるクロード・ロランの風景画への格好の案内であるばかりか、美術の枠を遥かに越え、17、18世紀のヨーロッパ文化の形成にも深く関わった「理想風景」の意味とその広範な影響を考察するまたとなしい機会にもなるものと思われます。



不忍池の西北に、池之端七軒町があった。現在では池之端二丁目の一角になっている。

幼年時代、時折、親父に連れられその地の伯父を訪ねた記憶がある。幼い時に得た印象は、成人しても残像として見え隠れするものである。とくに、自分の生活圏以外の自然の風景に接した時の第一印象は、なかなか消えてくれない。

父の兄は昭和20年まで七軒町にあった神社の社務所に住んでいて、氏子の世話等をしていた。元々運輸省の役人であったが、自分の性に合わないといって早々と退官していた。外国航路に関わる仕事をしていたので、英語の原書なども読め、地元では重宝がられていた。

七軒町に行く途次、初めて見た不忍池は、曇天であったのか霞がかかった大きな沼だと思った。決してきれいな水面ではなく、そのことが後々まで記憶に留まっていた。

昨年6月、当館に勤務するようになって、眼の前の不忍池と日々対面したせいか、従来のイメージが払拭されてきたような気がする。同じロケーションでも春夏秋冬さらに晴天雨天などにより、自然是微妙に変化し趣が異なってしまう。冬鳥の飛来時や春の桜の時期はもとより、7月から9月頃までの蓮の花の開花中は非常に美しい。この池は文字どおり大都会のオアシスともいうべき機能を十分に果たしている。

今日のような景観に整えられるまでには、糾余曲折があったようだ。50年前には稲が植えられ、ある時には、野球場が計画されたり、また、地下駐車場が予定されたりもした。その時々の必要性に基づき、より有効に活用するためのものであろうが、古い構築物を簡単に作り直す考えは改めるべき時期にきているのではないだろうか。このすばらしい美観が崩されることなく、後の時代まで同じ姿で保存されることを祈るばかりである。

中国の水面の話になるが、数年前、華中の宜興という小さな都市を旅する機会に恵まれた。江蘇

## 水面の回想

省にある人口5万足らずの陶器のまちである。ここでは磁器の景德鎮と違って、主に、庶民的な日常品を作っている。とくに、朱泥の陶器が有名で製陶技術には、5千年の歴史があるそうだ。

宜興へ行く道すがら、日本の演歌でお馴染みの無錫のまちを経由した。早朝の太湖はあいにくの天気で視界が遮られ、灰色に霞んでいて、今にも雨粒が落ちそうだった。その光景が頭のなかで既存のメモリーとダブって映っていた。水面がほんやりと広がっていて、多少大きめの池だなあと思った。決して美しい湖ではなく、子供の時に脳裏に刻み込まれた曇天の不忍池像と少しも違わない風景だった。歌の文句とは異なるが、太湖の畔を掠って、チャーターした車で丘陵の道を走った。白桃の畑等を車窓から眺めながらの2時間余のドライブであった。

あとで分かったことだが、太湖は琵琶湖の3倍以上あって、湖中には、島が48もあり中国五大淡水湖の一つだそうだ。そのとてもない規模に驚愕した。天気が好ければ有名な鹿頂山から美しい景観が確認されたのに、と残念がった。

宜興のまちは、外国人がめったに足を延ばさない所のようだ。その当時、現地では観光地にすべく湖水を中心に公園を造成していた。町のとば口に恰好の湖があり、その畔に中国風あづまやの亭であろうか多角堂のような骨組みが陽光に晒されていた。目玉となる史跡の無いまちで、客集めをするには環境整備が必要条件だということは、いずれの国でも同じなのであろう。

今では宜興の造園も完了していることだろうが、その後どうなっているのか。今日の不忍池のようにきれいに整備されていることと思うが、何故か気になる。機会をつくって再度訪れ、確かめて見たいまちの一つになっている。

# 財団インフォメーション

## ◆平成7年度の事業報告

財団設立後初の事業年度であり、事業計画に基づき支援の主目標を国立西洋美術館に置いた活動を行いました。

### 1. 展覧会、講演会等の支援

- ①「ギュスターヴ・モロー展」鑑賞用パンフレットの作成支援
- ②子どものための展示「描かれたふしきな世界を旅する」を国立西洋美術館と共同主催、チラシ・ポスター等作成支援
- ③「大英博物館所蔵イタリア素描展」を国立西洋美術館、東京新聞と共同主催、同展のチラシを作成支援、同時開催企画展を国立西洋美術館と共同主催、同展の鑑賞用手引きを作成支援
- ④「オルセー美術館展」(会場: 東京都美術館、国立西洋美術館学術協力) を後援し、同展記念シンポジウム「近代生活の革命—モデルニテと現代」を日本経済新聞社等と共同主催

### 2. 資料収集、調査研究の支援

国立西洋美術館の情報資料の充実に資するため、外国の図書資料、文献等を購入寄贈

### 3. 普及広報、職員研修等の支援

国立西洋美術館の展示予定(7年度下半期)を作成、国内外の学会分担金を始めとする涉外用経費を支援

### 4. 出版物の刊行

子どものための展示「描かれたふしきな世界を旅する」の鑑賞用セルフガイドを印刷発行

### 5. ミュージアム・ショップの運営

国立西洋美術館の開館にあわせ、218日を開設、平常展グッズ(31アイテム 159点)、企画展グッズのほかに、後援したオルセー展図録とCD-ROMも販売した。

### 6. その他、印刷物は国立西洋美術館の資料交換用として必要部数を寄贈、また、展覧会或いは調査研究のため来日し、国立西洋美術館を訪れた海外美術関係者や学識者などと国立西洋美術館関係者との意見交換交流には、全面的な支援を行った。

#### ◎平成7年度の会計収支状況は次のとおりでした。

収入 59,907千円、 支出(事業費) 25,636千円  
支出(管理費) 12,450千円

### ◆本誌創刊号に掲出いたしました財団の役員・評議員の現職が次のように変更になっております。(平成9年9月1日現在)

理事 櫻井孝穎(第一生命保険代表取締役会長)  
中江利忠(朝日新聞社相談役)  
福原義春(資生堂取締役会長)  
行平次雄(山一證券顧問)  
評議員 川口幹夫(日本放送協会顧問)  
佐治敬三(サントリー取締役会長)  
福田繁雄((社)グラフィックデザイナー協会副会長)

## ★ミュージアム・ショップからのお知らせ★

国立西洋美術館内のミュージアム・ショップは、平成9年度中も開設できませんが、国立西洋美術館所蔵品図録「名作選」、その他のカタログやテレフォンカードの販売はいたします。郵送によるお申し込み方法や販売価格は、事務局までお問い合わせください。

## ◆賛助会員について

財団は創設後直ちに賛助会員制度を設け、この財団の目的遂行への後援を継続してくださる篤志の個人・法人各位の応募をお願いしてまいりました。ご賛同いただき応じてくださった各位はつぎのとおりです。財団創設後、国立西洋美術館が工事休館のやむなきにいたり、主要な支援財源を他に求めなければならなかった財団にとって、この賛助会費によるご後援が大いに役立ったことは、申す迄もありません。ここに厚くお礼申し上げます。財団はこのことを記録にとどめ、こののち可能な限りの優遇をもってお応えしたいと考えておりますので、今後とものご後援を切にお願い申しあげます。

### ●個人会員

鹿島昭一、金平輝子、斎藤製一、島崎聰志、高階秀爾、樋口廣太郎、本田弘

### ●法人会員

アサヒビール、朝日新聞社、稻元印刷、印象社、鹿島建設、キヤノン販売、クマヒラ、サントリー、清水建設、新潮社、精養軒、トップアート、東京新聞、東京スタディオ、日本通運、日本ファイリング、野村證券、博報堂、美術出版デザインセンター、便利堂、森ビル、ヤマト運輸、雪印パーサー (平成9年9月1日現在)

年会費は個人10万円、法人会員1口30万円で、何時からでもご加入いただけます。下記のような特典もございますので、ご加入希望の各位は、先ず応募要項を事務局までご請求ください。

### ■会員優遇内容

1. 国立西洋美術館優待券(個人1枚、法人1口1枚)が発行されます。  
<国立美術館・博物館の展覧会観覧に有効です。>
2. 賛助会員証(国立西洋美術館の展覧会観覧に有効です。)を差し上げます。
3. 国立西洋美術館の展覧会招待状、招待券をお送りします。
4. 国立西洋美術館の所蔵品図録「名作選」や展覧会図録等をお送りします。
5. 国立西洋美術館の主催事業(講演会等)への無料参加ができます。
6. 国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品(対象商品)を割り引きいたします。

## ◆ご寄付について

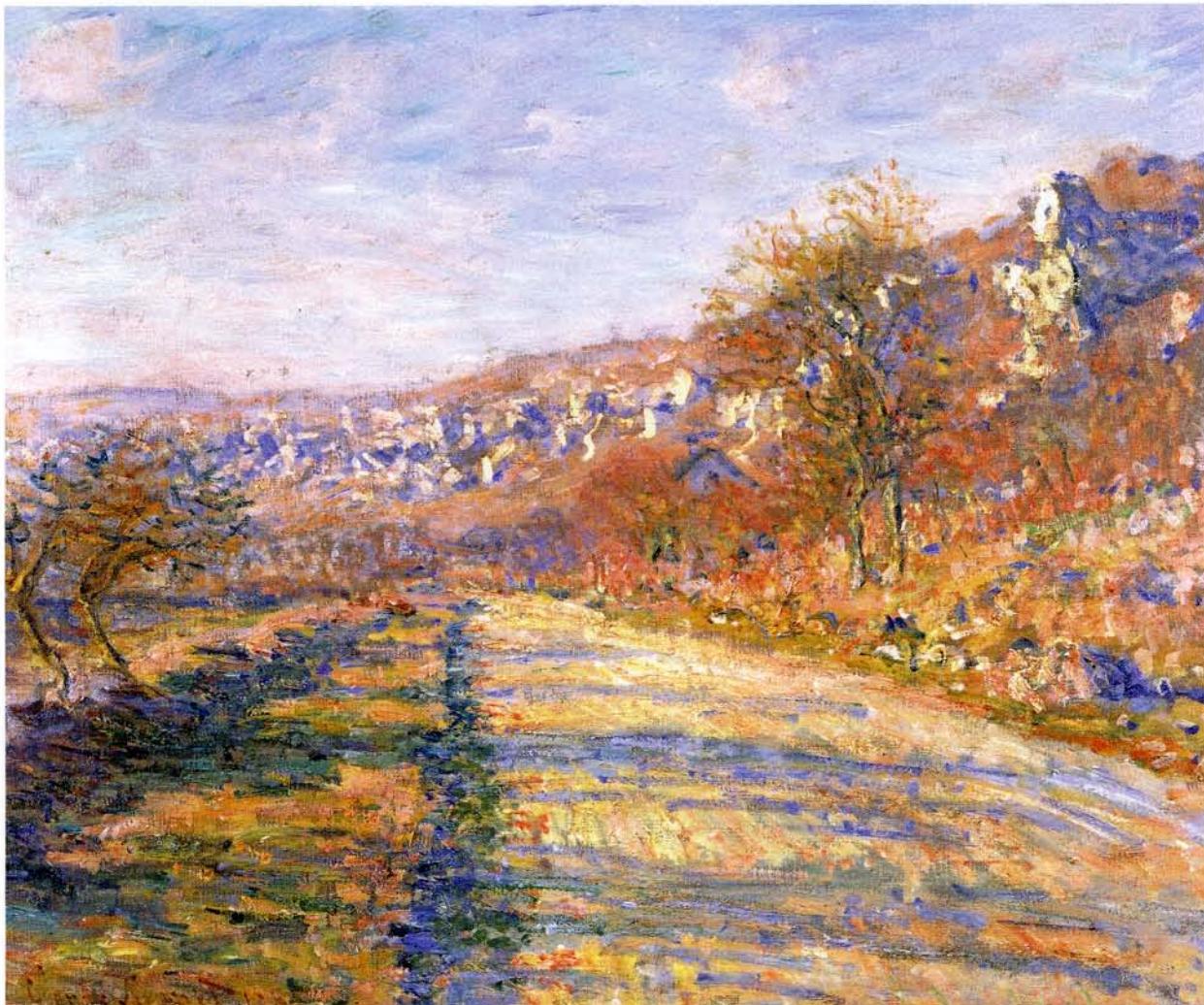
財団の目的に賛同され、創設以来運営費強化のためご寄付をいただきました各位に厚くお礼申しあげ、感謝の意を表します。

日本経済新聞社(平成8年3月)

小学館(平成8年11月)

## 編集後記

飛鳥文化の威容を伝える法隆寺が、今日も仏教徒の寺院として健在なのは、長い年月の間に幾度となく修復を重ねてきたからだとわれています。ル・コルビュジエ設計の本館も、当初のデザインを残したまま、来年、また皆さんの前にお見えします。本館とほぼ同じ年の身として、人間も修復ができるべきよいのにと思うこの頃です。⑦



クロード・モネ  
(1840-1926)

《ラ・ロシュ=ギュイヨンの道》  
1880年  
油彩・キャンバス 60.5×73cm

アルジャントゥイユに住んでいたモネは、経済的困難から、1878年の冬、セーヌ河をさらに下った寒村ヴェトゥイユへ居を移した。4年間にわたるこのヴェトゥイユ時代は、妻カミーユを失うなど、モネにとって最も苦しい日々であったと想像される。制作面でも、凍てついたセーヌ河の寒々とした風景を描いた「霧氷」、「流水」、「解氷」などの連作を手がけた。しかし80年代に入ると、この作品に見られるように画面は次第に明るさを取り戻し始める。もはや、アルジャントゥイユ時代のようにレガッタや川辺の散歩道を歩く着飾った人々などを配した華やかな風景が描かれることはなかったが、筆触はより自由で大胆になり、色彩も画面の中で自律的な個性を帯びてくるのである。この作品に描かれているラ・ロシュ=ギュイヨンはヴェトゥイユからわずか下流に位置する小村である。



ジョルジョ・ヴァザーリ  
(1511–1574)

《ゲッセマネの祈り》  
1570年頃?  
油彩・板 143.5×127cm

この絵の作者ヴァザーリの名前は、むしろルネサンス芸術家たちの貴重な伝記を残した著述家としての方が有名かもしれない。レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロをはじめ、多くの巨匠の生涯について豊富なエピソードをちりばめた大部の著作『芸術家列伝』は、1550年に初版が出版されている。しかしヴァザーリ自身も、メディチ家が統治する16世紀半ばのフィレンツェで、最も重要な画家・建築家として活躍したアーティストだった。有名なフィレンツェのウフィツィ美術館の建物を設計したのもヴァザーリなのである。

この作品は、ユダの裏切りによって逮捕される直前、苦悩のうちに神に祈るキリストを描いている。深い夜の闇を破って光の中に天使が現れ、キリストに聖杯を差し出している。前景には眠りこけた3人の弟子、背景にはユダに先導された兵士たちが見える。おそらく北方の風景画の影響を強く受けた、夜景の効果が印象的な作品である。



ヤコポ・デル・セライオ

奉納祭壇画：聖三位一体、  
聖母マリア、聖ヨハネと寄進者  
1480-85年頃  
テンペラ・板  
127×75cm

#### ●誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフェロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

**ZEPHYROS** 国立西洋美術館ニュース  
ゼフェロス

ZEPHYROS 第2号  
印刷発行日 平成9年10月28日（年2回発行）  
編集 国立西洋美術館  
印刷 株式会社 稲元印刷  
発行者 財団法人 西洋美術振興財団  
〒110 東京都台東区上野公園7-7  
国立西洋美術館内  
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135